

● 6月選評

小島なお

・桜望子（千葉県）

湾曲表現で

伝えすぎた感情が

空を飛んでゆく

海猫の遠鳴

相手に向かう心が直線すぎるとき、口から発せられる言葉は湾曲する。空をゆく海猫はカーブが大きすぎて明後日へ飛んでいった私たちの感情だったものだ。

・吉富 快斗（埼玉県）

真白い浮きを皆で渡る夢

海上に浮かぶ白いブイ。あれは水深や岩の目印、海難防止のための境界線。皆で渡ればだれかひとりくらいはこの世の切り岸を無事に渡りきれるだろう。

・モラン（神奈川県）

無理に笑うと お金の音がするよ

あらゆるものから感情を取り去ると、そこに何が残るか。事実も義務も倫理も、人を動かすのには不十分で、悲しい悲しい金銭のきらめきと響きが必要。

・こはくいろ（大阪府）

輪郭を求めています

あなたに触れられて

曲がったままのまゆ毛

うれしくて、はずかしくて、困ってしまつて、卑屈になって、しあわせで形を失ったまゆ毛。何度生え替わってもあなたの感触をまゆ毛は長く覚えている。

・＼＼青田（千葉県）

人工知能桜の中の震えには

甘く儚く男根にぎる

桜の美しい震えのなかで、人工知能は夢を見る。もし人間のように愚かであれたら。もし生来の性を備えていたら。もし死ねるなら。叶わない望みを自ら慰める。

・小井 詩文（京都府）

言葉失おうがいいじゃない

どうしようもない僕らは

愉快的鼻歌に守られている

どんどんコミュニケーションが失われてゆく暮らしのなかで、いずれ言葉を失う時が来る。言葉がなければ音を。今度は音が失われるまで生きればいい。

・小川いなせ（神奈川県）

『『ごめんなさい』なさい』

『『感情労働は現代社会の病理』
でしてよ』

消費者にポジティブな心理の働きかけをして報酬を得る感情労働。利益のためならよろこんで感情を使役させられる。まるで貴族が生活を演ずるように。

・郡司和斗（茨城県）

くりかえす青葉の

くりかえさない涼しさに

きつと なんと

まばたきしたら

過去から未来へ季節は同期しているようにも見えて、この青葉はあの青葉であり、いつかの青葉となる。瞬くたびに今と同じ今が、今しかない今が入れ替わる

・松下 誠一（東京都）

馬乗りになつて慰め合いながら

言語を手放すまでの秒読み

言語は人と人とを対等にする道具でもある。けれど、心底の絶望にある時は、もつとフィジカルな、ときに肉体の主従関係に身を置くことで慰められもする。

・高橋ちひろ（宮城県）

病室のぬるい雪の上は常世

重力だけが二人を生かす

白いシーツの上の身体。白という色はつねにほかからの引力に引き寄せられる。

弱った二人が二人でいる存在証明はここに居る、それだけに尽きる。